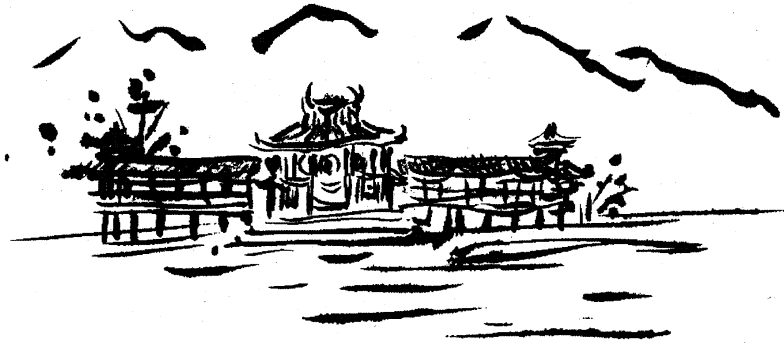


巨お
棕ぐら
池いけ



「宇治では、巨椋池の蓮が、今は盛りであろう…」
堀河の尼が、芙蓉と景弘に宇治への供を言いつけたのは、清盛が嚴島神社を初めて参詣した翌年のことであつた。

この日、供を揃えた一行は、小舟を仕立てて鴨川を下つた。桂川と合流してさらに下り淀津までくると、左に巨椋池が大きく開ける。さらに池の北岸に沿つて舟を進めると伏見津に着き、畔の小宿に泊まつた。宿の部屋から見える巨椋池は、季節の変わり目に氾濫する川水の遊水池として、対岸が望めないほど蓮をはじめ多くの水辺の植物が茂り、鳥や水棲生物が群れていた。

「伏見、宇治と、この辺りも、庵主さまは、何ぞご縁がござりませうや」
景弘は尋ねた。

尼は笑みを返しただけで、何も答えなかつた。

「夜明けと共に、宇治まで舟で行つて、平等院にお参り致しましょう」
尼は、そう景弘に告げた。

「巨椋池の蓮の花は、明け方に開き、その鼓を打つような音が聞こえます」と、尼は微笑んだ。

景弘は、蓮の花が開く音をぜひ耳にしたいものよと、思った。

都の南郷の宇治には、貴族たちの別荘が多く、宇多天皇の別荘は後に藤原貴族の頂点に君臨した左大臣道長の別荘「宇治殿」となつて受け継がれていた。

「かなわぬものなし…」

といわれた道長の権勢は、その子の頼通よりみちにも引き継がれていた。

百年余り前に創建された平等院は、広大な屋敷の一郭に、頼通が父の冥福を禱いのる菩提ぼだいの寺として建てたものであった。

本堂の阿弥陀堂は、西方極楽浄土をこの世に現出したいとの頼通の願いだった。

鳳凰ほうおうに似た姿から「鳳凰堂」と呼ばれたのは、江戸時代以降のことである。

元喜元年（一〇五三年）頼通の開基。そして開山は、小野道風の孫に当たる僧の明尊みょうそんである。

「極楽浄土のようなお庭…」

堀河の尼がいうとおり、その浄土式庭園と阿弥陀堂の佇たたずまいに景弘はたちまち魅入られていた。

宇治川の水を引いた池の向こうには、美しい鳳凰ほうおうが双翼をひろげた格好で、朱塗りの阿弥陀堂がその影を池面に映し込んでいた。

「阿字ヶ池と名づけたこの水面は、景弘どには、海に見えませぬか…」

と、尼は微笑ほほえんだ。

景弘は、声を失って立ち尽くしていた。

「これを見せたい…と、庵主あんじゅさまは、我らをお連れ下されたのか…」

御堂みどうは、池の中島に建って東を向いている。

景弘が、その仕掛けに驚いたのは、折から明けゆく空に立昇る朝日が、堂の中央に安置された阿弥陀のお顔に、さっと光を射し当てたからであった。それは、仄暗い御堂の中で、一点円窓の中に阿弥陀仏のお顔を、自ら発す光の如く照らし出していたのである。

恐らく僧明尊の知恵であつたらうか。

池を挟んで岸辺から阿弥陀堂を拝するように意図された「まぎれもない西方浄土……」に、思わず景弘も手を合わせて念仏を唱えていた。

景弘は、宇治の平等院の秀麗な佇まいを目にして、鮮やかに父の言葉を思い浮かべていた。

「この水面に浮かんで見える阿弥陀堂の姿を、ぜひ父上にお見せしたい」

景弘は、なんとかならぬか、芙蓉に質した。

「この近くに、絵師を存じております」

応えたのは、堀河の尼であつた。

景弘は尼に召された絵師に、厳島の御笠灣の形を示し、その中央に椋皮葺に替えた平等院の阿弥陀堂を画かせた。さらに厳島別宮にもある神楽殿を加え、両横の岸まで翼廊を延長させた。出来上がった俯瞰図に、社殿の朱の柱が、青い海に写る姿を画かせた。

「これこそ、お父上頼信どのが命を懸けられた姿に違いありませんなあ」

堀河の尼は、出来上がった絵に、神妙に手を合わせた。

長寛二年（一一六四年）九月。

平清盛は、四十七才。嚴島神社へ参詣し、自ら法華經を講讚した。

講讚とは、經文を講説して讚えることをいい、清盛の法華經への篤い信仰心を物語るものだった。

若い頃から天台への宗信の心を持っていた清盛は、法華經の実践者として「平家納經」という後世に残る第一級の美術品である写經を、嚴島神社へ奉納した。

この写經には、清盛の天台への篤い信仰心と共に、並々ならぬ嚴島神社への敬虔な気持ちが入められていた。同時に清盛は、自分の嚴島神社に対する信仰心を、写經することによって一門のすべての者に知らしめたいとの思いもあった。

清盛は、一門の身内に命じて、法華經の写經に勤めさせ、平安美術の粹を駆使して、絢爛豪華な裝飾を施した經卷を嚴島神社に奉納した。

膨大な經典を筆写したのは、清盛自身だけでなく、重盛、頼盛、教盛など一門の者がそれぞれ一卷を分担する形で手分けして筆写に当たっていた。

「法華經」二十八卷。「無量義經」、「觀普賢經」、「般若心經」、「阿弥陀經」各一卷と、清盛の「願文」を加えた全三十三卷が、それだった。

何れも五彩の料紙に金銀砂子や切箔がちりばめられ、見返しには優美な大和絵や唐絵が描かれており、軸首には水晶・鍛金の透かし彫りなどが用いられている贅沢なものであった。

写經を納めた三段重ねの銅箱にも、蓋表や側面に金銀の雲竜文の金具による裝飾を施すなど、經箱から

写経に至るまで、当時の工芸技術の粋^{すい}を尽くした意匠と技巧が凝らされていた。

「この、世にも美しい豪華な宝物である経巻を、それに相応^{ふさわ}しい壮麗な神社にお納め申したい…」
景弘は、そう、清盛に奏上し、宇治で描かせた絵を見せた。

「これが空海上人のお告げになった姿か…」

清盛は、高野山でのお告げの後、平家一門の繁栄ぶりを思わずにはいられなかった。

清盛から、神社造営に対する内諾の報^{しら}せが届いたのは、それからしばらくしてからであった。

父佐伯頼信が亡くなったのは、神社造営が決まった年の春先のことであった。

珍しく暖かな沿岸部にも里雪が積もり、暮れから体調を崩して床についていた頼信は、景弘が宇治から持ち帰った絵に満足げだった。

それでも、頼信は床の中から、嚴島神社造営のことをこまかく指示した。

頼信は、清盛が後白河院の勅願により、法住寺御所内に蓮華王院本堂を創建した際、この工事に資した詳細な図面や工法、資材、宮大工、石工、左官などを、景弘に調べさせ、報告させていた。

「この頃、既に父の脳裡^{のうり}には、嚴島神社造営のこまかい構想がおりであったか…」
景弘は、そのことに気づかされていた。

頼信の葬儀は、嚴島神社でなく、外宮のある地御前の寺で行われた。

頼信は、自分の遺体は、火葬せよと言ひ残していた。

地御前の浜で茶毘に付された父の遺体は、折からの春の気配に薄紫の山肌を見せている厳島弥山の靈峰を望む神官屋敷に遺骨となつて還り、祭壇に安置され、多くの会葬者の列が続いた。

この年、景弘は、掃部寮の三等官である掃部允正七位相当であり、宮中の清掃・儀式の会場設宮などを司つた。

佐西郡において景弘の権力も拡大していた。そして、寄進された所領は、更に清盛の平家一門の力となつた。

厳島神社神主として初めて都へ上つた景弘は、思いついて芙蓉と北野神社へ出かけた。

「会うて間もないお前さまと、こうしんさまへお参りした…」

二人は祠に袴り、厳島への助けを謝した。

「堀河の庵主さま…も、宮中へ上がられる前は、宇治の三室戸寺の巫女をお勤めであつた」

「宇治…」

景弘は、初めて聞く話であつた。

「あの中古三十六歌仙の一人である紫式部さまの血を引くもの…と、聞かされております…」
紫式部は、左大臣藤原道長の思ひ人。宇治の平等院とは深い縁があつた。

「わけあつて、お局の祖母に当たられるお方は、僧明尊に預けられた」と、芙蓉は明かした。

明尊は、天台の座主を追われ、最晩年に九十才の高齡で平等院の建立に尽くした。

「庵主さまが巫女勤めの頃、私の母も、宇治の巨椽神社の巫女でありました」

芙蓉の母は吉野の山寺に預けられ、女人結界の山里で、男のように修行して過ごしたという。

「そうであったのか…」

芙蓉の後ろには、堀河の尼がずっと付き添っていたことを、景弘は承知していた。

「西行法師さまとの縁も、男と女を越えた、もつと深いもの…」

何ゆえに、あのお二人は、我らが望みの実現に力を貸してくれたのか。景弘は、そのことには、自分が計り知れない、もつと深い事情があったと考えるべきだと悟った。

「景弘さま。庵主さまも、お前さまのことが好きであられる…」

芙蓉は、花が咲いたように微笑んだ。

景弘は、堀河の尼の深い慮りに、あらためて気づかされていた。

北野神社へでかけて、しばらく後のことであった。

「わらわの役目は、どうやら終わりましたな」

そう告げたのは、芙蓉だった。

芙蓉は、生まれ故郷の紀州へ戻ると、景弘に告げた。

景弘も、佐西郡の郡司と嚴島神社神主として、これまでのように京に続けることはできない。景弘は、清盛の臣下として、これまで通り奉公したいと瀬戸内の警固衆の束ねも続ける所存でいた。

「わしも国へ帰らねばならぬ」

景弘も、造営が始まる巖島へ戻り、神主家として工事の采配を取らねばならなかった。
「お前さまのこと、忘れませぬ…」

芙蓉の目に溢れる涙を目にした景弘は、胸を熱くしていた。

芙蓉とは、安芸国へ帰る景弘を見送った伏見の船着場で別れたきりになった。